

小学 1 年生の学級への参入過程における相互行為研究 — 「児童」になることをめぐる社会化過程に着目して—

平井大輝（大妻女子大学 非常勤講師）

〔本研究の目的と研究方法〕

本研究の目的は、学校という制度的な場での振る舞い方を小学 1 年生が身につける社会化過程を「学校的社会化」（北澤 2011）過程と捉え、教師・児童間の相互行為を分析することを通じて、「大人」が前提とする「児童」らしさを浮かび上げられ、「制度」の問題として学校への適応問題を議論する可能性を探究することである。

具体的には、①教師が学校的な振る舞いを児童に教える過程（＝児童を受動的な存在として扱う過程）のみならず、②学級活動を中心に展開される、学級の決め事を児童がともに決める過程に着目し、制度的な場面への児童の参画過程を分析する。児童の参画とは、教師が「正解」を前提に教授する活動とは異なり、学級活動のように活動への取り組みを教師が児童に任せることで成り立つものであり、学級での活動方針の決定過程に児童が関わることや決定事項に従い児童が取り組む活動などである。相互行為に着目するのは、「大人」の側からのみ社会化過程を捉え、子どもを「未熟」な存在と前提とするのではなく、「大人につきあう子ども」（伊藤 2020）という観点からも分析を行い、「大人」の側が暗黙のうちに前提としてしまいがちな「小学 1 年生」らしさを明らかにするためである。

上記の関心のもと、研究助成の期間に行った調査及びこれまでの調査で収集してきた公立・私立・国立小学校の学級における映像及びフィールドノート（北海道圏、東北圏、中部圏、関東圏、関西圏、四国圏）のデータをもとに、教師・児童間の相互行為を分析した。分析の際には、エスノメソドロジーや会話分析の研究知見を手がかりとすることで、学級での教育活動を成り立たせる人びとの方法を明らかにした。研究成果は以下の通りである。

1. 平井大輝, 2024 年 9 月, 「学級の『継続的』な活動を支える教師の指導—教師・児童間の相互行為に着目して—」 日本教育社会学会 第 76 回大会, 信州大学.
2. 平井大輝, 2025, 「『小学生になる／でいること』の相互行為研究—学級の困難と可能性—」 立教大学博士学位申請論文, 全 179 ページ
3. 平井大輝, 2025, 「学校安全と ICT 機器の使用に関する覚え書き—小学 1 年生の学級のエスノグラフィーを通じて—」 『立教大学大学院教育学研究集録』 第 22 号, pp. 9-19.

〔研究成果の概要〕

①教師が学校的な振る舞いを児童に教える過程：椅子への座り方の教授に着目して

今日では、幼保小連携の取り組みなどを通じて、幼稚園・保育園の段階ですでに学校的な振る舞い方を子どもが学習する機会がある。そのため、教師は一定程度学校的な振る舞い方を身につけているように思える小学 1 年生に対して、学校生活の新参者として学校的社会化していくことが求められている。「小 1 プロブレム」への対応策がさまざまに議論され、実践されている今日の社会状況において教師に課されている上記の課題を達成するやり方を明らかにする上で、すでに椅子に座っている児童に対して、「適切」な座り方を教える学校的社会化過程を分析した。

分析の結果、学級における児童の社会化は、学校的社会化の内容において「連続性」を維持しつつも、相互行為上「断絶」をつくり出し、「新たに」学級という文脈に位置づけ直させることで達成されていることを明らかにした。教師は児童がすでに身につけていることや「知っている」ことを児童に「自ら」問い直させることで、児童の課題を簡素化し、他の児童とともに学級で活動するという課題を達成しやすくしていたのだ。

②制度的な場面への児童の参画過程：教師が「正解」を前提に教授する活動とは異なる社会化過程

これまでの（学校的）社会化研究が看過してきた、児童が学級での活動に参画する主体になる学校的社会化過程を明らかにした。児童の参画とは、教師が「正解」を前提に教授する活動とは異なり、学級活動のように活動への取り組みを教師が児童に任せることで成り立つものであり、学級での活動方針の決定過程に児童が関わることや決定事項に従い児童が取り組む活動などである。

分析の結果、学級での活動に児童を参画させていく際には、個々の児童には還元できないものとして「みんな／自分たち」の活動を扱うことで、教師は個々の児童の具体的な取り組みを「学級」での取り組みとして位置づけていることを明らかにした。教師は児童に任せる部分と強制する部分のどちらも含み込んだ指導をすることで、児童を学級での活動に参画させており、教師はそのほがまで学校的社会化しているのである。